



太陽神・ラー

アポビス……神々の宿敵である闇の大蛇

ヌト………天空の女神

ハトホル……ラーの眼から生まれた女神

ゲブ………大地の神でヌトの夫

「太陽神ラー」、エジプトの神話を知らなくても、この神の名前を聞いたことのある人は多いのではないのでしょうか。

神話に登場する多くの神々の中でも特に偉大な神であり、頭上に太陽の円盤を戴いたハヤブサの顔をした男神ラーのことを、古代エジプトを治めた王たちも深く信仰していました。王国を治める王たちは「ファラオは太陽神ラーの子孫である」と宣言し、自分たちは地上における神の代理人的存在として、

その地位を強く確かなものにしていったのです。

ラーは昼の空を旅する船「マンジエト(マンデト)」と夜の空を旅する船「メセクテト」を持ち、二つの船を乗り換えながら世界を照らします。この船には両端に東の神と西の神が立ち、ラーと共に乗り込んだ神々と旅をします。この世界を照らす旅は安全なものではありませんでした。太陽の船が進む先には、神々に激しい恨みを持つ闇の大蛇アポビスや、世界の破滅を企む悪魔たちが待ち構えていたからです。これらの悪魔たちと激しい戦闘を続けながら、ラーは太陽を運び世界を照らすのです。

ラーは毎朝、天空の女神ヌトから生まれ、水浴びをしてから「生命の野」で乳を与えられ、力を蓄えて東の空に姿をあらわします。昼の旅を終える

と昼の船から夜の船に乗り換え、地下にある冥界へ夜の船を進め、死者の国を照らしながら夜の旅をします。長い旅を終えると、女神ヌトの口から胎内へ入り、旅の疲れとアポピスとの戦いで傷ついた体を休めます。そして再び、朝になると新しく生まれるのです。

このようにして死と再生をくり返し、絶大な権力を手中におさめていた太陽神ラーですが、徐々にその身に忍び寄ってくる「老い」と長年にわたる悪魔たちとの戦いによる肉体と力の衰えには勝てませんでした。年老いたラーにかつての勢いがなくなっただことを知った人々は、弱った太陽神を指差してあざわらい、尊敬の念をいなくなっていました。天にあって世界の出来事をすべて知ることができるとラーの眼は、これまで太陽から与えられた恩恵を忘れ、自分を笑う人間たちの行いに怒り、罰を下そうと考えました。そのために自身の眼を大きな

鳥の姿をした女神ハトホルに変え、地上につかわしたのです。

ラーの怒りでつくり出された女神ハトホルは、巨大な翼を広げて地上へ向かいました。そして女神の姿におびえて山の中へ逃げ込んだ人間たちを見つけては、次々と虐殺をはじめました。地上でくり広げられる悲惨な光景に、ラーはたいへん後悔し、どうにかして人間たちを助けなければならぬと思いを直しました。「こんなことを望んでいたのではなかった。このままでは人間が死に絶えてしまう。それだけは避けなければ」と考えました。

ラーは人間の血によく似た赤いビールをつくり出すと、それを山中に撒き散らしました。やってきたハトホルは赤いビールを人間の血だと勘違いしてすべて飲み干し、ひどく酔っ払ってしまいました。そのため自分に与えられた「人間を皆殺しにする」という仕事をすっかり忘れてしまい、地上に住む人

間は絶滅せずにすんだのです。

しかし皮肉なことに、この出来事によってラーの力はますます弱まり、とうとう神々の王の座から引退するときに訪れます。世界の支配権を大地の神ゲブへと譲り渡したラーは、牝牛に姿を変えた天空の女神ヌトの背中に乗って天上の宮殿へ去っていききました。後にラーは夜になると地下にある冥界へおもむき、死んだ者たちに太陽の光を与えていました。しかしラーが死者の国である冥界を訪れている間、世界から光が消えて真っ暗になってしまいました。そのために暗闇にまぎれて悪事を働く人間があらわれました。これを知ったラーは自分が地下に行っている間、知恵の神であり月の神であるトトに地上を照らすように言いつけました。こうして昼間は太陽が地上を照らし、夜は月が地上を見張るようになったのです。

ケプリ

エジプト神話における太陽神の「柱」で、太陽を運ぶスカラベ(フンコロガシ)の姿で描かれます。

フンコロガシは卵ではなく、フンの中から生まれる姿から「自ら生まれる者」と呼ばれ、古代エジプトでは自然発生するものだと思われていました。

後脚でフンを転がしていく姿が太陽を運んでいる姿と似ていることから、太陽神ラーと同一視されました。

昼の太陽を運んだケプリは夜になると冥界を旅し、太陽神ラーと同じように天空神である母ヌトの子宮でしばしの休息をとります。そして新しく生まれ変わりを翌朝になると甲虫の姿となって「明けの太陽」を運びます。



天空神・ホルス

ラー……………太陽神。ホルスの父親とされる。
 オシリス……………冥界の王。ホルスの父親と言われる。
 セト……………オシリスの弟でホルスの叔父。神々の敵と言われる。
 ハトホル……………ラーの眼から生まれた女神。ホルスの妻。
 トト……………知恵の神。万物の記録者。

エジプト神話に登場する神の中でも、最も複雑な存在であるのがこのホルスです。

太陽神ラーの息子であるホルスと、冥界の神オシリスの息子であるホルスが存在し、この二つのホルスはまったく違う性質の神でした。しかし名前が同じことから長い時間をかけて同一視されるようになり、そこから枝分かれしてさまざまな種類のホルスが誕生していきましました。驚くべきことに、その数は20種類を超えたと

われます。

ホルスの名前には「遠方にいる者」「上空にいる者」「星々の間に住む者」という意味があり、このことからラーの息子、天空神、太陽神としての属性を持っています。

素早い動きで空を飛び回るハヤブサの顔を持ち、太陽と月はホルスの両目だとされてきました。また残されている絵画では、幼児のころの指をくわえたホルス（ハルボクラテス）、少年期のホルス（ホルサイヤ）、たくましい青年に成長したホルス（ハレンドテス）、シンボル化されたホルス（ホルアハティ）など、実に多くの姿が描かれています。

一方、オシリス神の息子とされるホルスの方

